

## 川のほとりで

神野麻郎

食事のときはやや忙しい。

廊下にガラガラと配膳のワゴンが回ってきて、係の太った女性が「はい、幸村さん」とトレイを渡してくれる。光昭は礼をいって受け取る。お粥はそのままでは熱すぎるので、一まぜして、容器のまま洗面台に溜めた水にしばらく冷やしておく。別室から熱いお茶を汲んできて、それも洗面台に冷やしておく。それから病室の、外に面したガラス戸を開け（少ししか開かないようになってい）、その隙間から手を伸ばしてベランダに置いた包みから大根と魚のフレークのかん詰めを取りだす（この病室には冷蔵庫がないから、食物の類はそうしてベランダに出して冷やしておく）。大根を皿に擦りおろし、醤油を少量かける。味の濃そうな魚のフレークも、少しだけ皿に分ける。

「この病院は食事がな、貧相じゃわ」とさつき付き添いを交替して一週間ぶりに自宅に帰っていった、光昭の母の道子はしごく不満げだった。今朝などはちぎったパンをミルクに浸したものに、リンゴの擦りおろしだけだったという。それで道子は、食事のたびにそうして大根おろしと魚のフレークを加えるように言い置いていった。なるほど今も、トレイの上を見ると、昼食だとしても粗末というべきだろう、お粥のほかには、野菜の煮物を少量盛った一皿と具の無いみそ汁だけだ。「前の病院の方が、ずっとよかったわ」と道子がこぼしたのも無理はない。ここに移ってくる前に三カ月ほど入院していた大学の附属病院では、むろんすべてが理想的というわけではなかったにしても、食事には担当医師や療法士の思慮が反映していた。

「ごはんじゃ」。すでに目を開けていた義郎の耳もとで光昭は声を張り上げる。「おう」と、義郎はベッドの手すりにつかまり、起き上がろうとする。身体の平衡が保ちにくく、頭が振れてつらそうだが、それもリハビリになるからと手を貸さない。ようやく起き上がり、横を向いて足を床に垂らす。スリッパを探る。光昭はそこへ船を接岸するように車椅子を近づけ、固定する。義郎は片腕を延ばし、車椅子の腕をつかみ、横に身体を移動させ、椅子に座る。その一連のぎこちない動作も、光昭は車椅子を押さえるだけで、ただ見まもっている。

カーディガンを義郎に着せる。ボタンは自分で止めさせる。車椅子を、テレビの載っている可動式の台の前まで動かす。その台のテレビの下から板状のテーブルを引き出す。その上に新聞紙を敷き、義郎の胸の方にまで広げる。義郎の首にも半タオルのエプロンをつけ、胸に垂らす。そこまで用意をした後、ト

レイをテーブルの上に置く。すると義郎はもうスプーンを握り、口のわきからよだれを垂らしている。「ちょっと待ってよ」と声をかける。義郎は二、三度うなづくが、必要以上に頭が前に沈みこんでしまう。

洗面台に冷やしてあったお粥を、ほどほどに冷めているのをたしかめてトレイの上に置く。義郎の左手は不器用にその椀の端を押さえ、右手のスプーンはすぐ中身をすくいとりにかかる。大きくすくい、それを口もとへ運ぶ右腕の動作が、麻痺のせいでどうしてもすばやくなくなってしまふ。口にとどくまでのわずかな距離の間に半分以上がこぼれてしまふ。それでも食欲は旺盛で、三口、四口と立て続けに口に入れる。光昭は耳もとで、「ゆっくり、ゆっくりな」と注意を促す。食物が気管支の方に入ってせきこんではいけない。義郎はまた大きく頭を振り、不本意なように手の動作をいったん止める。

健康な時も、義郎は早食いの方だった。昔からそうだった。遠い以前、家族で丸い膳を囲みながら、「飯はだまって食え」と何度も義郎に叱られたような気がする。食膳に向かえば黙々と食べていた昔の習慣の名残が、義郎には今もある。そして今はそればかりではなく、食欲に食事に向かうような態度も加わっている。不自由な身体の動きが、余裕を奪い、かえって食物に挑みかかるような姿勢をあらわにする。だから、この「ゆっくりな」という注意は、食事何度もくりかえすことになる。

おかずの皿の方にも別のスプーンを添える。煮て圧しつぶしたジャガイモとニンジン、それに切り刻んだ青菜。それらを自分ですくいとりは何かでできるが、しかし義郎の口はそれらのすべてを受けつけるわけではない。少し固いものや大きいもの、粗く刻まれたものもだめだ。口の右半分は軽い麻痺があるし、そのためもあって入れ歯がはずれやすい。いったんはずれると口の中があわれに混乱する。痩せたので入れ歯が合わなくなったせいもあるのだろうと夫婦は相談して、十日ほど前、この同じ病院の一階にある歯科にかかり、新しい入れ歯を作ることにしたそうだ。

スプーンでみそ汁をすくうのは、今の義郎にはむずかしい。そばから光昭が適当な間隔ですくうと、義郎はそれに応じて赤児のように口を開く。舌の上に流してやる。スプーンを抜こうとすると、義郎の口はこぼすまいとすぼまり、チュツ、チュツと音をたてることもある。「うまいかえ？」と聞く。塩分が抑えられているからうまいはずはないのだが、うんうんと義郎はうなづく。

大根おろしや魚のフレークも、少しずつスプーンですくって口に入れてやる。大根おろしは義郎の好物、「うまいかえ？」と光昭はまた耳もとで聞いてみる。義郎は今度は一瞬動作を止め、ふたしかな発音で、投げ出すように「うまいわ」という。

正面に置いたお粥の椀には、しだいにこぼしたおかずやみそ汁がまじっていき、あわれな状態になってしまう。それでも義郎の食欲は、お粥の全部とおか

ずの七分ほどを胃の腑に納めた。スプーンを置き、大きな息をついたので、「もうええかえ？」と聞く。義郎は二度三度と頭を前に沈めこむ。トレイの上はちよつとした戦場のように食物の断片が散乱している。それらは新聞紙の上や胸のタオルも汚している。

十分たらずの、それなりにせわしかつた運動をやめた義郎の表情には、わずかにやすらぎと満足のようなものが読み取れる。それはともかくも食欲を満たし、またその作業を何とかこなしたためだろう。いや、その満足の程度は「わずかに」どころではないのかもしれない。病人にとつて食欲を満たすという行為は大事な快樂の一つであろうし、まして義郎のように終わりの見えず長々と続く窮屈な、単調な日々をすごしている者にとつては、一つの至福ですらあるのかもしれない。

「今度はお茶じゃな。歯を取るか」。義郎はすぐ理解して口をもぐもぐさせ、入れ歯を浮かせる。光昭は上下のそれを取って洗面台に置く。そしてそこに冷やしてあつた湯呑みを取り、温度をたしかめてトレイの上に置き、ストローを添える。義郎は片手で湯呑みを押さえ、頭をかしげ、お茶を吸う。ふつうに飲むと、口に入れる量の加減ができにくいからか、どうしても咽せてしまうのだ。ストローで飲むとぐあいがよいのは、交替で何度か付き添いに来ている光昭の妻の朋美の考案によるらしい。「少しずつ、少しずつな」と声をかける。二、三度に分けて、半分ほど飲んだ。

次は薬。道子があらかじめ紙にくるんでまとめてある一回分には、八、九種類もの錠剤や粉薬が含まれている。それらの中身をすべて取り出し、スプーンに盛って少量の水でまぜる。その白濁したものを、「薬じゃ」と言つて舌の上に置く。義郎は痩せて浮きあがつた喉仏を上下させてそれを嚥みこみ、冷ました白湯をまたストローで飲む。「どれ、嚥めたかえ？」と光昭は義郎に口を開けさせ、中をのぞき、薬の粒が残っていないのをたしかめる。

それで、ややせわしかつた食事は終わった。光昭は後かたづけにかかる。トレイを部屋の方の端の方に下げしておく。湿した半タオルで義郎の口のまわりをふいてやる。髭がわずかに伸びたごわごわしたあごにも、よだれや飯粒が付いている。胸もとにかけていた半タオルをはずし、汚れた新聞紙を丸めてゴミ箱に捨てる。

「どうするで？ベッドに寝るかえ？」と聞くと、義郎は顔も上げずに何か答えるが、光昭には通じない。歯をはずしているのによけいわからない。三度も聞き返して、義郎の発する、風が擦れるような音の連なりから、やつと「テレビ」という単語を想像する。光昭は新しい発見のように、「テレビかえ？テレビ見るんかえ？」と大声でいう。「おう、おう」という義郎の頭はまた前に振れる。その義郎の頭のすぐそばにあるテレビをつけ、車椅子を少し引き、イヤホンを渡す。右の耳はほとんど聞こえなくなり、左の耳もかなり遠くなっているから、

ポリウムは最大近くまで上げる。それから義郎にリモコンスイッチを手渡す。義郎はそれを目に近づけ、未知のおもちゃを与えられた幼児のように、「うん、うん」と語尾を上げて自問しながら、細かいスイッチのボタンを探る。画面がニュースに切り替わったところで、指の動きは止まった。

もともと、四カ月ほど前の朝、自宅で居間の方からテレビの度はずれた音量が聞こえたのを道子が不審がったところから、脳梗塞の症状が発覚したのだった。その日のうちにこの県庁所在地の大病院に入院した。検査の結果、心臓から脳へと、途中で四本に分かれて続いている頸動脈のうち、二本はそれまでにすでに詰まっていたが、とうとう三本目が詰まってしまったことがわかった。「残る一本で何とか現状を保っています。これはきわめて珍しいケースですよ。ですから、いつ、何が起こっても不思議はありません」と担当の脳神経外科の医師に告げられた。その若い医師の示すCTのフィルムには、白い道のように写る血管のうち頭部まで届いているものは、たしかに一本しかなかった。

その最後の一本が詰まったり破裂したりしないように、血圧を薬で微妙にコントロールする治療がずっと続いている。いや、それは治療というよりも、現状を維持するためのだけの化学的な処置にすぎなかった。もはや明白に、薬による微妙なバランスの上のみ、義郎の命は置かれているのだった。

「お父さん、テレビ、わかるんかえ？」

車椅子の背にもたれて顔を上向け、少しも動きのない義郎に光昭は聞いてみる。分節の乏しい声が、「半分じゃな」と答える。内容が半分しかわからないという意味だ。ベッドで寝転んで雑誌を読んでいるときに同じように聞いても、「半分じゃな」と同じように答える。

光昭は洗面台で入れ歯を洗う。歯ブラシで汚れをとり、よく洗浄する。それを義郎の口にすぐ入れてやる。それから皿や湯呑みやスプーンを洗って拭き、元の場所にしまっておく。タオルも洗って干しておく。トレイを返しに行く。

戻ってくる、義郎が片手を振りながらもごもご何か言う。食べる恰好を見て、「へう」と聞こえる。「へう……ああ、ひる、昼かえ。ああ、そうする」。義郎は息子の昼食を気づかっているのだ。

光昭はガラス戸を開け、ペランダの包みの一つから道子が近くのコンビニで買い置いてくれた寿司と果物を取り、義郎のかたわらの長椅子に座る。ペットボトルのお茶を飲みながらそれを食べているうちに、義郎は車椅子で居眠りを始めている。肩を少し揺すって、「お父さん、お父さん、ベッドに移らんせ」と声をかけ、また岸壁に船を着けるように車椅子をベッドに寄せる。前とは逆の要領で、義郎はいくつかの動作を何とか自力でこなしてベッドに移り、最後に、「おう」と声を出して寝転ぶ。布団を整えてやる。「おしっこは？」と聞く。「まだ、ええわ」。「少し眠るかえ？」。「おう、おう」。

見ていると、たとえば弱くとも、それまで義郎の身体が外に示していた意志

が、子供のあどけなさで、急速に内側にまどろんでゆく。病氣と休戦するとう意味で、眠りが今の義郎にはやすらぎなのか、それとも眠りもまた苦痛でしかないのか、光昭にははかりかねた。義郎の眠りをたしかめると、光昭はわずかに取り残されたような気持ちを味わい、はじかれたように長椅子に戻ってまた寿司をつまんだ。

コートを着こみ、一階に降りる。北側の自動ドアを出たところで、少しためらったが、ポケットから携帯電話を取り出して会社にかけてみた。梶川がすぐ出た。変わったことはないかと聞いた。間髪を入れず、梶川は言いつのつた。「それが課長、ちよつと大変なんですわ。今さつきKから苦情が来て、納期が昨日やつたのに、納品されてないいうんですわ。先方のS課長がえらい見幕で、えらい損害や、どないしてくれるんやと。謝って、在庫分はすぐ届けるように手配しましたけど、モノはまだ受注量の半分もできてないんですわ」

しぼりだすような声で、その主の渋面がわかった。

「けどその件は、もう一週間も前に、Kに断りを入れさせたやろ。担当の長谷川に。ラインの故障で生産が間に合わないとは断わって、了解を得とるはずや。来週の木曜まで、一週間延ばしてくれるゆうことになつとるやろ」

「ええ、それは私も聞いてます。で、S課長にもそう言うたんですわ。そやけど、自分はそんなことを了解したおぼえはないって。責任者の自分が知らんと言うつるのやから、間違いはないって」

「長谷川にたしかめてみてくれよ」

「はあ。それが長谷川君、今日奥さんの出産でオフなんですわ。自宅にも、携帯にもかけてみたんやけど、つかまらんですわ。課長、たしかに長谷川から、Kから了承を得たと、報告、受けはりましたか？」

「いや、それは……」

そんな気がするのだが、という言葉で光昭は呑みこんだ。数ある用件に紛れて、あるいはこのごろの父の容態や家族のことに気をとられて、それは怠ったかもしれない。

光昭の中で、常は会社のことと身内のこととは、頭の中でも行為としても区別されていた。二つは別の種類のことだし、中でも管理職としては会社の事項が優先されるのはやむをえない。だが、このところその別であるはずのこともどもがなぜか奇妙に混線してきている。明らかに義郎の入院以来そうなのだ。ただ、考えてみれば、仕事、家庭とはいっても、木が枝分かれしているも幹や根は一つだというように、かかわる自分一つなのだった。人生という分野では二つは侵しあっているのだった。そして幹や根のゆらぎは、枝にも伝わってくるようだ。

「そうですか。困りましたな。どないしましょ？部長に相談しましょか？」

言葉こそ逸脱しないが、その梶川の調子には底意地の悪いものがあると光昭は感じた。自分がこのところ月に一、二度金曜日と土曜日に休暇を取るのを、父親の介護のためだと梶川には伝えてある。梶川は表面は同情を示すが、もとも薄情そうな男ではある。部課の仕事が滞るとそれを遠回しに光昭のせいだと責めてくるようなところがあつた。

「待ってくれ。S課長には私の方から連絡をとってみる。君の方は、残りの分の生産を急いで月曜日まで製造できるかどうか、ラインの方に聞いてみてくれ。いや、何とかそうしてくれるようにラインを説得してくれ。それが確認できたら、S課長にそう連絡してほしい。それが終わったら私にも報告をくれ。部長への報告はそれからよい。ともかく先方は急いでるのやから、生産を急がんとな」

つい声が大きくなつたのか、そばのドアから出てきた付き添いらしい年配の婦人が光昭の方を振り返つた。婦人と入れ代わりのように、製薬会社の営業マンふうのスーツの男が暗い顔つきで入つていった。

「わかりました。月曜までですね。ラインの方に頼んでみます」

光昭はさらにほかの二、三の業務の確認をしてから電話を切つたが、すぐさま、会社に電話など入れなければよかつたと後悔した。これでは休暇にならないではないか。

だが、トラブルを聞いてしまつた以上、すぐK社に電話を入れなければならなかつた。電話の向こうのS課長は梶川に聞いたとおりの調子で、困る、困りますなあ、と不機嫌にくりかえした。落ち度は光昭の側にあると一方的に決めつけているふうだ。しかしこの手違いの原因はどこにあるのか、酒好きでふだんもミスが多いらしいSの不注意にあるのかもしれないかと疑いながら、しかし光昭はともかく下手に出て一応のわびを述べ、何とか納期を早める努力をしてみると伝えた。親会社のKの担当者の心証をそこねるわけにはいかない。結局Sは、来週の月曜日の中に納品されるのなら了承する、それができない場合は、お世話になつてゐる幸村さんには悪いようやけど、こつちの損害も大きいから、契約書に従つて損害補償を求めますな、と冷たく言い放つた。

携帯電話をポケットに納めると、光昭はタバコを取り出してせわしく喫つた。同じようにタバコを喫いに外に出る付き添いや来客が多いと見えて、ドアのすぐわきに円柱形のたばこ盆が置いてある。そこは日陰になつていて、風の筋まで黒く冷たかつた。

光昭は損害補償をするとなつた場合の金額を考えた。しかしすぐばからしくなつた。そうだ、こんな納品をめぐるトラブルなど、今までに何度もあつたではないか。あわてることはない。こちらのミスと決まつたわけでもないのだから。

寒空に目をやりながら、製品の生産や流通、それをめぐるやりとり、トラブル、親会社との上下関係、仕事の組み合わせや変更……それらが見えない束となって不安定にうごめき、その中で無数の人間が動き回り、呻吟したり笑ったり酒を飲んで愚痴ったりしているありさまを思い描き、そしてそれをやや遠い感じで眺めた。いったいそれらにどんな意味がある？オレのオヤジが死にかけてるといふのに。

数メートル先には陽光が踊っていた。ふとその中に飛びこんでしまえばまといついた陰気が振り払えるような気がして、光昭はもう一本つけたタバコを途中でみ消し、明るみの中に踏み入ってみた。風の冷たさは変わらなかつたが、頬にあたる日差しが心地よかつた。目に映るままのこの風景の中に、ただ身をさらしてみたいと思つた。

大きな川の流れのそばの、都市の近郊で、刈田や畑に取り巻かれて新旧の住宅群や古い工場や商店が散在している。道の続くままに散漫にたどっていると、狭いところで車におびやかされたり、ものかげの犬にひどく吠えられたりした。

アパートらしき建物を見つけると近寄つてみる。大きな道路から少し離れたあたりに、農家が税金対策に建てたような、外見は小ぎれいだが安手普請のアパートがいくつも見つかり、「空室有。連絡先……」などと赤字でしている看板も目につく。それを手帳にメモする。外側から眺めて部屋の広さを推し量り、出入り口の段差などを調べてみる。また、そこから病院までの道筋を、義郎の車椅子を道子が押してゆく姿を仮想しながら目や足をたどつてみる。

携帯電話で、メモした「連絡先」の一つにかけてみる。しかし休日でもないのに誰も出ない。田舎らしくのんびりしていると思いつつながら、その時は軽く、後でまた掛け直してみようと考えたが、さらに風景の中をさ迷い、冷たい風になぶられているうちに、その意志を失つた。断念は、感情の部分からすみやかにやつてきた。

一カ月余り後に、義郎が今の病院を出された後のことだ。道子はそれを望み、光昭も勧めてみたのだけれども、リハビリのためとはいえ、見知らぬ土地のアパートの狭い一室で老夫婦が二人だけで暮らすありさまを想像してみると、どうしてもわびしさが先立ってしまう。実際に縁もないアパートのそばで仮想してみるとよけいにそうだった。週に二、三度、今の病院へリハビリに通うためとはいえ、くりかえす日々の長い時間を、ゆかりもない土地のアパートの一室で、二人はどう過ごすのか。買い物や食事や散歩で気を紛らわすことはあるとしても、部屋の外では見も知らぬ風景が明るみ、かげり、暮れてゆくことをくりかえす中で、二人はどんな思いをかみしめることになろうか。

病院を遠巻きにめぐるように歩いていると、ついに川の高い土手に突き当たつた。そこに上がつてみると、風とともに水の匂いがおし寄せてきた。枯れ草の川原が広がり、その向こうに青い冷たそうな流れが横たわっている。白い水

鳥の群れが遊び、何の漁か、川舟もいくつか出ている。対岸の土手の道路にも、下手の大きな鉄橋にも、車がさかんに往き来しているが、その騒音はほとんど届いてこない。

広闊な川の風景にしいて向かい続けていると、光昭は自分の呼吸が意識され、やがて不意にある観念に誘われた。永遠と無常という言葉と同時に思い浮かべ、心は、それら二つにまつわる相反する感じを、同時に味わう。この世の中に生まれて、義郎の生も自分の生も、誰の生だってほんの一瞬のこと、それにちがいなかろうと思う。けれどもまた、個体の生き死にを貫き、過去から未来へ連綿と伝えられてゆくものがたしかにある。その二つのことは、しかし二つのことではないだろう……。

空を仰ぎ、淡い色で満たされた目のはしを、黒いかげが通り過ぎた。おびただしい数の小鳥の集団だった。それはもつれあつてたえず形を変えながら、綿雲の早く流れている空の一隅を渡ってゆき、やがて溶けるように消えた。

弁当屋で自分の夕食分を買い、酒屋の前の自動販売機で缶ビールも手に入れ、病院に戻った。

義郎はベッドで目覚めて待っていた。「おしっこは？」と聞く。「おう」「するかえ？」「おう、するわ」「ちよつと待ってよ」。義郎は布団の下でもぞもぞと始める。光昭はベッドの下から尿瓶を取り出し、掛け布団の横をめくる。下着を十分に下ろし、両脚の間にアヒルの形をしているそれをあてがう。義郎の小さなものを指で押さえ、瓶の口に入れる。こぼれる音は初めだけで、後はあるかなきかだ。四、五十秒もして、「ええかえ？」と聞く。「おお、ええわ」。小さなものの先をティッシュペーパーで拭きとり、着衣を直し、布団を整える。尿瓶の中身を、廊下を隔てた斜め向かいのトイレに捨てにゆく。その水道で尿瓶の中を洗浄し、部屋に戻ってまたベッドの下の新聞紙にくるんでおく。

前の大学病院では、排尿のたびに時刻と量を用紙に記録するように指示されていたが、この末期患者を多く集めているらしい脳神経科専門の病院ではそれすらも求められない。道子によれば、医師や看護婦が見回りにくる回数も前よりよほど少ないという。点滴も入院の当座はあったものの、食事がよく食べられているからという理由で取り外された。病気の性質上、血圧を一定の範囲に保つことが大事だが、その治療も前の病院よりも大ざっぱだという。近い未来に起こるべき何かに向けて、一つずつ省略されていつているのか。道子の不満は、そのことへの漠然とした恐れでもある。

「どうだったぞ？」と義郎が寝たまま、にぶい動きの瞳をようやく光昭の顔にすえてたどたどしく聞くのは、アパート探しのことだ。

「まあ、ええとこはなかった」

「ほうか。なかったか」

それでもその顔に落胆しているようすは見えない。もつとも、入院以来、義

郎の顔の表情はよほど乏しくなっている。

「知らん土地の知らんアパートでな、お父さんとお母さんが二人だけで暮らすのは、やっぱり寂しいだろ？」

「そりゃ、寂しいだろの」

「それよりな、やっぱり家に戻って、地元で介護センターのお世話になったらええ」と、光昭は義郎に、もう三度目だなど思いながら、介護センターについて説明する。

インターネットで調べると、地元の町にも近年在宅介護支援センターができていくことがわかった。そこに電話すると親切に、障害の程度にもよるがお父さんの程度ではおそらく訪問リハビリのサービスが週二回、ヘルパーのサービスも週二回、低料金を受けられるだろう、と教えてくれた。手帳のメモを見ながら、そのことを義郎に、大きな声でゆっくり伝える。

だが在宅介護などというと、義郎にはまだだいぶ抵抗感があるのだ。他人に家の中を知られてしまうということはまだしも、長年市役所に勤め、福祉行政にも携わった義郎だから、その世界に顔見知りもまだたくさんいて、その人たちに自分の病気を知られたり世話されたりするのをみっともないと考えるのだ。お父さん、そんな見栄はつまらん、誰でも年とったら他人の世話を受けるのはあたりまえだ、世話をしていた側がされる側にまわっても、それはしかたのないことだ、少しも恥ずかしいことはない、と光昭は説得する。

義郎は結局、だが不承不承というふうでもなく、

「ほうか。ほうしてみるわ」と言ったが、言葉に熱はなかった。

それも無理はない。自宅に帰ってそこで療養すること自体が義郎にはまだ遠いまぼろしなのだ。四カ月前、難聴、歩行の障害が起こってあわただしく入院して以来、一度も自宅に帰ることなく、病院をハシゴしながらずっと病室で寝てすごしている。もう三カ月ほども続けている歩行や言語のリハビリも、初めはそれなりに意気こんで取り組んだものの、ほとんど上達をみない。車ならわずか五十分ほどの、今は道子が休息に帰っている自宅は、義郎の主観にはまだまだ遠すぎる。そしてそれはだんだん遠ざかっていっているかもしれないのだ。

何か義郎が言いかけると、実際のなこと以外で、義郎の方から語りかけてくるのは珍しかった。「カナちゃん」「アックン」と、光昭の二人の子供の名をかるうじて聞き取る。光昭は彼らの近況を、おもしろそうな話題を選んで少し話してやる。「ほうかあ」と義郎は、このときばかりはほほ笑みを見せる。

ずっと離れて暮らしていても、義郎は昔風に、孫をごく近いものとしてかわいがる。そして自分の血統を継ぐ者として、その将来に期待をかける。「アックンは、将来、何になるんぞ？」「カナちゃんが、女医さんになったら、えらい」と、これも珍しく、声に熱がこもる。それが、その程度に大きっぱな話で、また以前のくりかえしにすぎないとしても。「でもな、このごろ加奈は、医者は

イヤやと言いよる」

「ほな、何になるってぞ？」

「さあ。このごろはオシヤレにばかり気がいって、さっぱり勉強せんわ」

実際はそれどころか、加奈は学校をよくさぼっている。盛り場に出かけて仲間や少年たちと遊んだりしているらしい。先日などついに補導されてしまい、夫婦して警察署まで迎えに行っているというほど頭を下げ、卑屈な気持ちになつて帰ってきたのだった。朋美は学校からも呼び出されて注意を受けた。中学の後半ころからの娘の、自然的とも見えるエネルギーの奔騰を夫婦とも制御しきれしていない。娘は母親には反抗し、父親とは口をきこうとしない。義郎はそんな加奈の変化などはほとんど知らず、小学生のころの明るく素直に見えた孫娘をいまだに思い描いているらしい。

「女医さんでなかったら、……がええ」

「ええ？何ぞえ？」

「ぎんこう……」

「銀行員かえ？」

「おお」

「ほなけど銀行も、今はどんどんつぶれよるぜ。この間も……」

「いや……。それでも、かたい。銀行はかたいけんな。銀行がええ」

義郎のやさしげな、力の乏しい瞳が、少し強い光を宿したのを光昭はおもしろく思う。「ほうかえ」

義郎と話をするときには、自然に故郷の島の言葉が出る。親しく話そうと思うとよけいに、ふだんは忘れていた島の言葉が口をつく。

いったん会話が途切れた後、また何か義郎が聞く。「おかあさん」とやっと聞き取る。「お母さんは家にもう着いて、掃除や洗濯、しよるだろ。夜、電話してみるわ」

義郎はうなづく。

「お母さんは、あさつての朝、来るけん」

「あさつての、あさ」と、もつれる舌で復唱し、嚙みこむように二、三度うなづく。

病室は東向きなので、早くも部屋の中に薄闇が漂いはじめる。電灯をつける。義郎は目を閉じ、また眠りたいようだ。光昭は長椅子で壁にもたれ、読みかけの推理小説を開いてみる。やがて義郎のいびきが波音のように高まった。

携帯電話をたしかめると着信メールが二件あった。梶川と朋美からで、どちらも電話を待つというのだった。

光昭はまた一階のドアの外に出てタバコを喫った。タバコが燃えている間、どちらから先に電話をかけようかと少し迷ったが、まず妻に方にしてみた。し

かしつながらず、しかたなく会社の方にかけて。すぐ梶川が出た。

「あ、幸村課長ですか？お休み中なのに、すみません。あの、Kの件は、何とかラインの方に頼みこんで、月曜日中には納品できるように手配しました。そのことはご指示どおり、S課長にも連絡しました。それからですねえ、この件を佐々木部長に報告したんですが、部長は驚いて、Kの方に早速謝りに行かれました」

「部長が謝りに？なんでや？まだどこでミスが生じたか、わかってへんやろ。」

Kの方の内部連絡がうまくいかんかったんかもしれへんやないか」と光昭は思わずたかぶった。梶川はいったいこの件を部長にどう伝えたのか。正式な謝罪は事実関係をたしかめてからでも遅くはないではないか。内心、梶川はこの件を光昭の失点にしたいのかもしれない。部長が動いたということは、問題がそれだけ大きくなったということだ。ことの成り行きによっては専務にも報告がいくだろう。それは賞与にひびくかもしれないし、ここ数年急増したりストラにも関係していくかもわからない。

「しかし部長はですねえ……」

「わかった。わかったから。ともかく、長谷川をつかまえて、君からよく事情を聞いてみてくれ」

光昭はもうわずらわしかった。こちらはそれどころではないのだ。しかし梶川は、

「承知です。えっと、それから、Eとの契約の件ですが、そのことも佐々木部長は気にしてはります」と追い打ちをかけるようにいった。

「部長が何を気にするんや？」

E社とは月曜日に、新しいモデルの建設機械に使うある部品の生産について契約を取り交わすことになっている。部課としては大口の契約だった。明日の午前、社内で最後の打ち合わせがあり、光昭は余儀なく欠席するが、二カ月以上もかけて光昭が中心になって書類も手筈もすでに万端整えてあるはずだった。それは部長もよく知っていることだ。

「やはり、打ち合わせに担当課長がおらんのは痛い、とゆうてはりました」

「具体的にゆうてくれ。何が問題なんや？」

「いえ、それははつきりとは……」

梶川は今、不必要なことをいつているにすぎない、と光昭はますます不快になった。こんなときに自分と部長との親密さをひけらかすな、と怒鳴りつけたかった。

「準備は整ってるはずや。打ち合わせは、昨日確認したとおりにやってくれ。月曜日は早めに出社するよ。……梶川君、いろいろとすまないが、ともかく君の方でよろしく頼む」

「承知です。お休み中、お手間をとりました、どうも」

お休み中やと？オレは休んでるわけでない。オヤジを看にきてるんや。オヤジが死にかけとるんや……。だが今日梶川の言葉が一々気に障るのは、こちらの気持ちが悪くなるからかもしれないと光昭は思い直しもする。それともちぐはぐさは、あの父の病室の滞ったような時間のせいなのか。病室では時間がひどくゆっくりとしか進まない。まるで存在や命というものを手ざわりしながらのように進む。木の根元から遠いこずえを眺めているような感覚が光昭にまたやってきた。

うとうとしさを払い落とすように、光昭は大股で道を渡って斜め向かいのコンビニに向かった。気楽な週刊誌でも買おうと思った。

リハビリの時間が遅れているのを、義郎はしきりに気にしている。いつもなら午後三時過ぎに迎えが来るらしく、もうその半時間も前から車椅子に座って気持ちを整えていたのだが来なかった。光昭が看護婦詰め所にいきくと、今日は都合で少し遅れるという返事だった。義郎にそう伝えると、「遅れるってかえ」と、不満げな複雑な表情をした。夕方、五時過ぎになって、その迎えの若い男はようやく現れた。義郎は文句をいってもなく、素直に頭を下げた。光昭もついていくことにした。

最上階でエレベーターが開くと、すぐリハビリのための広い部屋だった。さまざまな設備があり、用具が置かれていて、感じは子供のための遊具室に少し似ているが、活気と楽しみには欠けている。いずれも若い、白衣をつけた男女の理学療法士が三人ほどもいるが、もう終わりかけのようで、どこかくつろいだ雰囲気は漂っている。患者は義郎のほかには歩行訓練をしている老婆が一人いるばかりだ。

パジャマ姿の義郎は、療法士に補助されながら、車椅子から、皮を張った四角い、二畳分くらいの広さの台の上に移る。寝転び、まず手足の関節の曲げ伸ばしを始める。片手、片足ごとに、数えながら十回ずつやる。右手、右足の動作がやはりぎこちない。「幸村さん、ゆっくり、ゆっくりやってよ」と何度も注意されている。人間の身体運動は、すばやい動作よりも、筋肉の持続力や平衡感覚を要するゆっくりとした動作の方がかえってむずかしいことが、義郎の動きを見ているとわかる。

下半身を左右にねじる。やはり関節や筋肉をほぐすのだろう。次いでうつぶせ、四つん這いの姿勢になる。

「右手を上げて。そうそう。戻して。上げて。はい、それを十回やってみて。そう、ゆっくり、ゆっくり。一……二……」

義郎は顔を前方に向け、しぼった声で数えながらする。その、それなりに歯切れのよい掛け声の調子は、あるいは遠く、戦争中の学校時代の訓練とつながっているのかもしれない。順に左手、右足、左足と、一つずつ上げ下ろし

をする。

「そう。よくできたね。では次は手と足を一つずつ、いっしょに上げよう。右手と左足、左手と右足というぐあい」

幼稚園で園児が「飛行機だあ」と戯れてやっているような恰好でもあるし、奇妙な踊りのようでもあるが、義郎は真剣そのものだ。額に汗をにじませている。光昭も床の上に手と膝をつき、同じようにやってみる。義郎はまずうまくやっている。腕にはまだ力がある。

「そう、よくできたね。次は右手と右足をいっしょに上げてみよう」

そうなると義郎にはむずかしい。いっそう真剣な表情で、先生に手助けされながらやっている。光昭も床でやってみる。

少し休憩した後、歩行訓練に移る。義郎の状態はまだ、杖で歩くのにはほど遠い。まず、台に腰掛けた状態から、下に車の付いた、胴あたりまでの高さの歩行器に、自力で立ち上がる動作を反復練習する。これは三カ月も前からやっていたかなり上達してはいるが、相変わらず、最後に立ち上がったときに上体が前後に振れ、危なっかしい。

その歩行器で、足を一步一步進めながら室内を往復する。この歩行も大股になるのを何度も注意されている。

この地上に二本の足でしっかり立つことのむずかしさを、義郎はこの数カ月間かみしめてきたのだと光昭は思う。昨日までは意識もせずにごくふつうにできていたことが、あくる日にはもうできなくなっていたのだ。ただ、立つ、というほどの簡単な動作ができず、苛立つこともあったようだ。だがふらつく義郎を見続けていると、逆に、人間が地上に二本の足で、それも狭い二つの足裏を地面に着けるだけで直立できるようになったことの方が、進化の奇跡のようにも思えてくる。まして歩くということは、ただ立つことよりいっそう複雑で高度な技術なのだ。二本の足で歩くことに人類の祖先たちは数百万年をついやし、そして人類となったのか。病院のリハビリルームで、老いた義郎は、今その太古の技の再習得に苦戦している。

リハビリはものの三十分ほどで終わった。

病室に帰り、ベッドに落ち着いた義郎は、あの飛行機のような、右か左かの手足を同時に上げる動作がむずかしかったと少し悔しがった。

「あれはむずかしいよ。オレもいっしょにやってみただけ、バランスとるのがむずかしかった。あれは誰にもむずかしいよ」と、光昭は思った通りを伝えた。

「ほうか」と義郎は少し安心したようだった。

まもなく廊下に配膳のワゴンが回ってきて、夕食だった。

食後の夜の時間は長かった。光昭は義郎の脚をもんだり、話したりしたが、どちらも長続きしなかった。義郎は疲れたのか、早めに眠った。

八時過ぎに光昭は会社にもう一度電話を入れた。梶川はもう退社した後で、

若い清水が出た。何か変わったことはないか、と聞くと、特に何もありません、と清水は疲れた声で答えた。背後に、もうがらんとした部屋の気配を感じ、光昭はなぜかやや安堵の気分を味わった。

母の道子にもかけて義郎のようすに変わりがないことを伝えた。洗濯してな、一週間ぶりに風呂に入ってせいせいしたところじゃ。今夜はビールでもいただいて、ゆっくり寝かせてもらおう、お父さんをよろしくな、という母の声はさっぱりしていた。

最後に朋美にかけた。お父さんどう？と聞いた後、朋美は、加奈がまだ帰っていない、塾にたしかめたら今日は欠席というのよ、また遊んでるんやわ、お父さんが帰らないことをいいことに、たちが悪いわ、と愚痴った。なかば聞き流しながら、加奈がそうだったのは、母親の愛情が薄かったからではないかとふと思った。篤志はどうしてる、と聞いた。ご飯食べたらず部屋にこもりつきり、どうせテレビゲームでしょ。明日は休みやし。朋美の調子には、週末のだれた気分と不安が入りまじっていた。

電話の後、光昭は夜気に震えながら立て続けにタバコを吸った。

病室に戻ると、義郎はいびきをかいてよく眠っていた。光昭は長椅子に寝そべりながら週刊誌を開き、それを特に興味も誘われずにざっとめくり終わると、また推理小説を手にとった。

十時、消灯。だが廊下の灯りがドアの磨りガラス越しに入ってくるので、部屋の中はほの明るい。長椅子の上に毛布を引き被って寝る。部屋は終日、暖房がよく効いてなまぬるい。義郎の大きないびきと椅子の硬さのせいで、光昭は熟睡できなかつた。けれども浅い眠りのなかで、不思議に心は休まっていた。会社のわずらいも、ここまでは追いかけてはこないようだ。仕事がうまくいかず、仮りに近い将来リストラに遭うとしても、それはそれで何とかしてやる。家族の心配についても、ここではおだやかに眺められるような気分になつてい

る。高校生の加奈もそのうちには独り立ちして、自分の人生を始めるだろう。父を看にきているのだが、逆に自分が父に守られているところもあるのかと光昭は疑った。これは親のそばにいるやすらぎというものか。親のそばで、自分のごく単純に子供という存在になつているのかもしれない。

義郎も昔、こうした日々を経験したことがあるだろうか。島で祖母が痩せ衰えて蒲団に臥していた情景が思い浮かぶ。高台にあったその部屋の窓からは葦原とアヒルの浮く池の面がよく見渡せた。その広い池の真ん中を、葬道と呼ばれる野辺送りの道がまっすぐに通っていた。祖母の棺はしきたり通りにそこをしめやかにたどり、山の墓地に穴を掘って埋められた。あのとき亡骸の前で珍しくも涙を流していた義郎は、やはり一人の子供であったのだろう。

反対に、今から二十数年も経てば、今度は自分がどこかの病院、今よりもさらに機能的になり、ハイテク化した病院で、壮年の加奈や篤志に付き添われる

ということがあるのだろうか。眠りの一歩手前で連想を自由に遊ばせているうちに、変哲もないことだとは思いつながら、生き死にの自然さといったことに光昭は思い至った。

小便の時は、義郎が光昭を名を呼んで起こした。義郎によれば、明け方までに三回ほどで、その時刻もだいたい決まっているのだという。一晚の間、義郎は実際、その通りに光昭を呼び起こした。

朝の起床の時もやや忙しい。

義郎は早く目覚めている。六時過ぎに長椅子から身を起こした光昭が、「もう、起きるかえ？」と声をかけてみると、待ちかねたように、「おう」とベッドの手すりをつかみ、半身を起こす。室内灯をつけ、カーテンを開けると外界は青みがかり、街灯がしょぼくれだしていた。家々や田畑はまだ眠っているようだが、道にはたまに自転車やバイクが通っていく。

手前は義郎にたしかめながらやる。まず別室から小さなヤカンと洗面器に湯を汲んでくる。洗面器にはタオルをつけておく。食事の時と同じように重ねた新聞紙を膝の上に敷き、別の空の洗面器を置く。それからコップのぬるま湯にインジンを数滴垂らした液をつくり、それでうがいさせる。液は洗面器に吐き出す。また液を歯ブラシにつけて口中をこすってやる。舌の表面も軽くこする。よだれといっしょに洗面器に吐き出す。その後、ぬるま湯で二度、三度とうがいをする。口もとを拭く。

次いで、夜の間はずしてコップの水につけておいた入れ歯を口に戻す。そして電動の髭剃り機を渡す。髭剃りは自分でさせる。頭髪の方はもうあるかなきかだが、髭は濃い方で、手は遅いからあたるのにだいぶ時間がかかる。左手で皮膚を押さえ、しわを延ばしながらやっているが、右手の動きは荒く、時々頬骨やあごにぶつけている。それでも昔から身だしなみには気をつかう方だった義郎は、念入りに時間をかけてやるので、大方は剃れていく。終わると、ほとんど光昭が仕上げをする必要もなかった。「きれいに剃れとる」と告げながら、不自由になった手でのその朝々の作業への習熟ぶりに、悲しいような気分もまじらないではない。

最後に湯につけておいたタオルを絞って、顔、そして首回りを拭いてやる。理髪店でされるように、義郎はやや仰向き、すっかりゆだね、気持ちよさそうな顔をする。色黒の、しわの多い荒れた皮膚にわずかに血の色が浮かぶ。

そうした一連の洗面の作業が終わり、後かたづけをすると、二人の動きははたと止まった。その後はもう何もすることがなかった。健康な時なら、洗面はいくつかある朝の作業の流れの中の一つにすぎないが、ここには新聞が届いているわけでもなく、次に着替えを始めるわけでもない。二人でじっと耐えるように、一時間後の朝食を待つだけだ。

もう戸外はよほど白み、自動車の音や人の声など、町の目覚めの気配がする。外界の明るさのために、部屋の中はかえって光があせてゆく。

光昭は自分の洗面を済ませる。「おしっこは？」「まだ、ええ」。光昭は口もとにタバコをくわえる所作をして、「ええかえ？」と聞く。義郎も同じように口もとに手をやり、「おう」と行って、「いい」という所作をする。軽い笑みが浮かんだ。義郎の喫煙の習慣は、四カ月前に倒れた時以来奪われている。

光昭はエレベーターで一階に降りて、戸外に出た。暖房に饅えた空気の中にずつとしたので、早朝の寒気が心地よい。一服した後、屈伸や開脚をして、身体をほぐす。それから川の方へゆつくり走ってみる。ほんの百メートルほどで土手だった。小道を見つけて駆け上がる。東の空の焼けているのを受けて、広い川筋はもう明るい。遠い対岸の土手道を走る車の色もわかる。

土手を流れの方に少し降りた草地で、腕立て伏せやストレッチをする。学生時代に覚えた空手の基本型も、思い出しながらいくつかやってみる。硬まっていた筋肉や関節がしだいにほぐれてゆく感覚を味わう。狭い病室に終日閉じ込められていることに反発するように、身体が自由を喜んでいる。深呼吸をする。

夜中にも一度、こうして出てきたのだった。そのとき川筋はほとんど漆黒だった。水が昼間よりも強く匂った。そして深い闇の中に数カ所、小さな火がゆつくり動いているのを見た。距離感が皆無だった。遠くの川舟の灯りか、それとも川面の波のわずかな閃きにすぎないかとも思えたが、ただそれは裸火の色と形をしていた。光昭はそれを不吉に感じた。ぼうつと白く浮かびあがっている病院の建物を振り返り、その感じにしばらくこだわった。今ここへ来てみたのも、多少はそれが気になっていたからだ。

だが、世界が目覚め、ものが色と形をあらわしていく今、そんな不吉なものはどこにも見えはしない。

やはり粗末だった朝食を済ませてから、義郎はテレビを見ていたが、すぐに飽いたようだ。ベッドに戻って、枕もとの雑誌を取り上げた。政治経済中心の固い月刊雑誌を寝ながら読むのは、吏員時代からの長い習慣だ。入院してからもそれは続き、付き添いの家族も二、三の雑誌の購入にいささか気を配った。雑誌を読む義郎の姿は、まだ元気で自宅にいたときの義郎の像に連続している。家族には、それは義郎の脳の健康のささやかな証明のようにも思われた。

答えはもうわかっているが、光昭は「わかるかえ？」と聞いてみる。やはり、「半分」と答える。「半分もわかったらええ」と、さらに内容を聞こうとしたが、やめた。

朝日で部屋は明るい。手持ち無沙汰の光昭はまた長椅子で推理小説を開いた。午前中に一度看護婦が来て、血圧と体温の測定をした。体格のすぐれたおばさんが来て、モップで床を清めていった。

その後で光昭は階下に降りて家に電話を入れた。パートに出かける前の朋美は、あわただしそうに、加奈は昨夜遅く帰ってきたといった。会社にも連絡をとった。明るい声でサツちゃんが出、課長、大変ですねえ、お父様、大丈夫ですかあ？と尻上がりの声で聞いた。土曜だが出勤している梶川に、変わりはないかと聞いた。

「課長、昨日のKの件ですがねえ。長谷川君に聞いたんですが、彼はこう言ってますわ。先方にはこちらの申し出はちゃんと伝えた、Kの方ではその件を検討してすぐ返事をくれることになっていました。課長にもその報告はたしかにした。けどその後、Kからの返事は自分はもらってない。先方のS課長から直接課長に返事があったものと思ってた、こう言うんですわ」

「そうか。ちよつとわからん話やな。どっちにもミスがあったということか……」と答えいながら、光昭はひやりとしていた。長谷川からの報告を自分はいい加減に聞いて誤解してしまったのかもしれない。もし長谷川のいうとおりの事情で、しかもKから返事が来なかったのなら、こちらから督促すべきだった。Kの方でもどうしたわけか返事をよこさなかったのは瑕疵だが、もともとこちらから持ち出した話なのだから少なくとも詰めを怠ったのはこちらの手ばかりだろう。

「わかった。オレの不注意もあつたようやな。長谷川には月曜日に話すから」

「それと……、部長が怒ってはりますよ」

「それも月曜日や。ともかく後は君の方でよろしく頼む」  
受話器からなおも関係の束のようなものがざわざわと侵出してきそうなのを阻止するために、光昭は早く電話を切りたかった。

病室に戻ると、すぐ義郎が便意を訴えた。

車椅子に移らせ、廊下を横ぎって斜め向かいのトイレに運ぶ。患者用のトイレはドアがなく、カーテンで仕切られ、中には把手が縦横にいくつも付けられている。義郎はそれにつかまりながら車椅子から立ち上がった。光昭はかがんで、パジャマや下着を下げてやる。義郎は便器に座る。「ゆっくりさんせ。終わったら、呼ばんせ」と声をかけてから、車椅子を後ろに引いておき、廊下に出た。部屋に戻った。

五分ほどして、呼ぶ声があった。行くと、義郎はもう便器から立ち上がっていて、便器の底の水が少し濁っている。「待ってよ。そのままだな」と、光昭は紙を使う。終わりに、道子にいわれたとおり、濡れたティッシュペーパーで拭く。腰や足は痩せ、しかも乾燥した皮質が浮いて下着にもぼろぼろ落ちてくる。それを払い落としながら、「ようけ、できたかえ？」と聞く。「ちよつとじゃ」。義郎は胸部レントゲンを撮るときのように、把手にしがみついて、壁に向いたまままだ。「よし、できた」。床にある水洗のボタンを踏む。下着とパジャマのズボンを上げ、車椅子に移す。帰りは、リハビリになるからと、自分で車椅子を動

かさせる。

今日は土曜日でリハビリは休みというので、「ほな、ここで少しやってみよか？」と呼びかけると義郎はうなずく。掛け布団を去り、ベッドの上で手足の関節の曲げ伸ばしから始める。前の病院で見よう見まねで覚えた運動に、昨日リハビリルームで見た運動を加えていくつかやらせる。義郎は言われた通りに、「一、二、三……」と声を掛けながらやる。しかし、前に数度、光昭が付き添いに来たころのようには熱がない。まじめに取り組もうとする姿勢は以前と変わらないにしろ、どうしても気分にあきらめがまじっている。それを感じても、光昭の方にもそれを叱咤する意欲はほぼ欠けているのだ。

二十分ほどでやめた。ベッドを整える。「疲れたかえ？」「おう、疲れたわ。うまくいかんのう」。それから義郎はしばらく眠った。

昼食をとっているとき、光昭の弟の俊介とその子供二人がやってきた。俊介の家族はこの病院から車で五分ほどの所に住んでいる。というより、二つ目の病院を俊介の家の近くに選んだのだった。今日は土曜日で、会社も学校も休みだ。姉の小学六年生の女の子の方が、義郎にチョコレートを手渡した。明日がバレンタインデーだからというのだが、女の子がそれを告げても義郎にはあまり通じたふうではない。しかし、義郎の表情には小さな孫たちを迎えた場合の精気が出ている。孫たちは長椅子に仲良く並んで掛け、よく動く瞳で義郎の食事のようすを不思議そうにながめている。

食後、皆で院内を少し「散歩」してみようということになった。孫たちが車椅子を押す。車椅子を先頭に行列をつくって廊下を進み、病室の並んでいる左手の廊下に折れ、突き当たって引き返し、結局まっすぐロビーの端まで行く。病院の規模のわりには広くとつてあるロビーには、同じ階の患者や付き添いや見舞い客が数人、ソファアに掛けたり、話しこんだりしていた。

一面に張られている厚いガラスの窓を通して、一キロほど向こうに緑の山並みが見える。その山並みは川とは反対の南側にあり、奥深く県南の山地へと続いている。空は今日も晴れているが、光がわずかに色づき、空気が湿っぽいようだ。

しばらく黙って景色に向かっていた義郎が、不意に誰にともなく、大声で何か言った。笑顔を浮かべている。急にひとり気分が浮き立ち、はしやぎだしたようだった。子供たちの目が驚いている。

「え、何ぞえ？」と俊介が聞き返すと、義郎はさらにひとしきり、はしやぎ、はなやいだ。口わきからよだれがさかんに垂れる。

「シマ、島って言よんな……」と俊介は、兄を見、また父に聞く。

「島に帰りたいってかえ？」

義郎ははつきり、首を横に振る。今度はやや機嫌を落としたのか、わめくよ

うに、またひとしきり言う。途中で「先生」という言葉が聞き取れ、光昭はああ、と急に腑に落ちた。耳もとで、

「島中先生だろ？」と言ってやると、義郎はこくりとうなずいた。

前の病院でも、南向きのロビーで山並みを眺めながら同じように急にはなやいだことがあった。それはこういうことだった。戦争中のこと、義郎が故郷の島を離れ、この都市にある親戚の家に下宿しながら旧制中学に通っていたころ、島中という校長がいて、戦争中でも英語教育を重視するような立派な先生だったというのだ。その山並みを一つ越えた所に、その学校が、県立高校となって今もあるのだ。義郎は山を見てその向こう側にある学校を思い、その時代を思い出し、その校長先生の記憶をよみがえらせたらしい。義郎の中には、何かそれを語る必然があるらしい。

脳の機能の一部が停止してしまったとはいえ、会話の内容に奇妙なところはべつに感じないが、耳が遠く言葉の発音が不自由だから、どうしても会話の量は減ってしまう。目覚めている長い時間には、いや、夢の中でも、義郎は過去の記憶に、それも若い時代のそれに遊んでいることもしばしばあるのだろうか。と光昭は思う。ロビーでは、日差しや山並みの景色がそれを刺激するのかもしれない。光や色が、六十年近くも前に義郎を連れ戻し、一瞬義郎の心をはなやがせるのかもしれない。

病室に帰って、義郎をベッドに戻し、光昭と俊介は義郎の病状や今後のことについてしばらく話した。近くにアパートを借りる件は、俊介も反対だった。ここを出された後は、しばらくは、狭くて窮屈だとしても、俊介の家で療養してこの病院にリハビリに通う、母親の道子のためにもそれがよいだろう、そこで病状が安定すれば自宅に戻り、地元の在宅介護支援センターのサービスを受ける、同時に専門医のいる病院を近くで探し、連絡をつけておくことにする。などを兄弟で話した。

買い物に行くとかで、まもなく俊介の家族は帰っていった。

午後、二人の見舞い客があった。

一人は、近くの町に住んでいる義郎の親しい甥、光昭の年の離れた従兄で、光昭に、不動産の商売や趣味のビリヤードについての最近の成功譚をいくつかまくしたてて帰っていった。帰った後、「あいつはいつも、あんなんじや」と、義郎は非難するでもなくいった。もう一人は、義郎が倒れる直前まで囑託で勤めていた、私立の養護施設の園長で、自身も糖尿病でぐあいがよくないのだといながら、丁重に、やはり光昭に、義郎が園のためにいかに熱心に働いてくれたかを語っていった。

義郎は見舞い客としゃべるのはつらそうで、応対を光昭に任せ、ベッドに寝て目を閉じていた。ただ、園長が帰っていく時には上体を起こし、相手の両手

をとって激して何かいった。もつれる舌で、こんなになってしまつて情けない、迷惑をかけて申しわけない、園の皆さんにはくれぐれもよろしく、などと告げているようだった。高い鼻梁の両側にははらと涙が伝い落ちた。

三時過ぎから言語のリハビリがあつた。看護師に連れられて、エレベーターで上階に行く。光昭はそれにもついていくことにした。

部屋では、白衣の若い女の言語療法士が机の前に座つてにこやかに迎え、義郎は車椅子のまま、その向かい側に位置どる。

「幸村さん。こんにちは」

大きく、明確な発音で話しかける。

「先生、こんにちは」

頭を下げた義郎の口から早くもよだれが糸を引く。光昭は持つてきたハンカチで拭きとつてやる。義郎は先生の前に座らされた小学生のように、やや緊張気味だ。背筋を伸ばそうとして、微妙に頭が振れる。

「どうですか？ご気分は？」

「はい。気分は、ええです」

一言ごとに、力む。

「そうですか。幸村さん、この隣の方は、どなたですか？」

「え？」と聞き返し、光昭の方を見る。右の瞳が少し流れ、光昭はふと不安に襲われる。「息子、です」

「ああ、前に話しておられた、長男さんですね」

「はい、長男、です」

「神戸に住んでおられる」

「はい、そうです」

「幸村さん。ご家族は他に、どなたとどなたですか？」

「はい。家族は、えーと、息子がもう一人と、家内です」

「お孫さんは？」

「はい。孫は、えーと、五人です」

「そうですか。幸村さん。ご家族がたくさんおられて、お幸せですね」

「はい」

それから若い療法士は、義郎に、短かい音の連なりを平仮名やカタカナで大書した紙を渡して数度づつ読ませた。どういうぐあいなのか、特定の発音のところ、入れ歯がはずれ、口があわれになってしまう。よだれがしきりに出る。

その次は、絵本を読むのだった。少女が野原にイチゴ摘みに行く場面を描いたカラフルなページが義郎の前に広げられる。絵を眺める余裕もなく、義郎はすぐ文字を追いかかるが、所々詰まり、そのたびに、高い声で「うん？、うん？」と語尾を上げてもしかがする。同じ行をくりかえし読んでしまうこともある。一頁の末尾まで、遠い。

終わって病室に戻るとき、義郎は車椅子でぐったりしていた。何も言わないが、ふがいなさをかみしめているのだと光昭にはわかった。

父を一人にして、光昭はまたタバコを喫いに出た。会社に電話を入れてみようかと考えたが、やめた。家に連絡するつもりにもなれなかった。

外は曇り、だいぶ冷えてきた。

六時に夕食。夜は雨になった。

十時ころ寝についてからは、昨夜と同じに、小便をとるために何度か名を呼ばれた。

寝つけないままに光昭は、ある観念を反芻し、思いめぐらしていた。その観念というのは、前の病院でやはり付き添いの夜に思いついたもので、「父は、やつと王様になった」というものだ。

義郎は寝たままであれこれと命じる。もはや誰かに使われることはない。食物に困ることもない。怒るのも笑うのも泣くのも自由だ。どんな言葉で何をわめても許される。それは王様だろう。王様に、義郎は七十年余もかけて、やつとなれたのだ。人はそうして人生の最後にこそ王様になれるのか。今はあくせくと暮らしている自分も、あと四半世紀も生きて父のような年齢になれば、王様になれるだろうか……。

以前はそんなふうに使えたのだったが、しかしそれは単純すぎた、浅はかだったと今、光昭は思い直す。医師の管理下に置かれ、一日中ベッドにしばらくつけられている人間が、どうして王様だろうか。自由、どころか、拘束され、数々の不自由を耐え忍ばなければならぬ日々なのだ。いうなら、むしろ奴隷の状態に近いではないか。前にあんなふうに戻省もなく思えたのは、義郎のためというよりは、むしろ父の苦痛を正視したくないという自分の側の機制からにすぎなかったのだろう。

そうした思いとは脈絡もなく、また光昭は、一つの昔の記憶を反芻した。

紀伊水道に浮かぶ小島。そこは昔こそ潜水業や釣りで栄えた時代もあったが、しだいに過疎化して、今は人口もわずか三百人ほどに減ってしまったという。

その島にまだ賑わいもいくらか残っていた時代のある日、その島の東側の高い崖の下で、父子は釣りをしている。青い大洋がたゆたい、沖からゆつたりと波が寄せてくる。義郎はまだ三十歳をいくつか過ぎたくらいで、今の光昭よりずっと若く、光昭はまだ小学二年生くらいだ。伊達にサングラスをかけた義郎は、黒髪を風になぶらせながら、裾を波の洗う突き出た岩の上において、長い竹竿を構えている。崖は急斜面で落ちているので、義郎の赤い浮きが浮かんでいるあたりは、海の色も黒々として、海底にはいかに大物がいそう。小さな光昭はそこまでは行かせてもらえず、こちら側の安全な場所にいて、短い竿を色も淡い海面に突き出している。

そのときの光昭の心は、どうしても、釣りの楽しさよりは父へのこだわりに占められていた。

そのころの三年間ほどは、道子がその故郷の島にある保育所に勤めを持っていたので、本土の市役所に勤める義郎とは、一種の別居生活をしてきた。義郎はたいてい土曜日の夕方の定期船で島に帰って来、月曜日の早朝の便で出かけていった。ふだん離れているからか、あるいは後年よく口にしたように、自分のついに叶わなかった夢を子供に託すつもりでか、義郎は帰ってくる小学生の光昭の勉強にうるさかった。土曜日の夜は必ず光昭の一週間分のテストをチェックした。満点でもほめられることはなく、悪い点数のものについては、「何でこんなんがわからんか」「たるんどる」「性根が入つとらん証拠じゃ」などと怒鳴られ、平手で打たれた。罰に参考書の問題を夜遅くまでやらされた。それを間違うとまた打たれた。光昭はよく泣いた。時には母親がとりなすような口をはさんでくれたが、義郎はこの点だけは頑として聞き入れなかった。だからそのころ、他のどんなことよりも土曜日の夜が光昭には恐ろしかった。その夜は心が打ちのめされ、何もかもがつかなくなった。まわりを見てもどの父親もテストの成績くらいでこんなに怒ることはないようだ。どうしても自分だけが、と孤独な悲しみでもあった。

けれども一夜明けると、義郎の機嫌はすっかり直っているのだった。ふだんの、おだやかな父がそこにいた。そんなふうにおだやかな好人物というのが、義郎の本来の性格だっただろう。だがそのころの光昭には、自分を叱りつけて殴るのが父親の本性で、やさしさの方は鬼がつけた仮面のようにしか思えなかった。それで夜に打ちのめされると、すっかりくじけた心は次の朝にも容易には立ち直れなかった。

日曜日には、手持ちぶさたの義郎はよく釣りに出かけた。義郎は時に光昭を誘った。終日父といっしょにいるなど内心は嫌でしかたがなかったが、幼い光昭は強くいわれると断りきれなかった。

朝のうちに、島の南部に固まっている集落から、釣り竿をかついで山道に入る。道は畑や溜め池の間をくねくねと登って、やがて島でもっとも高い灯台のそばに至る。そこからもまだしばらく島の東側の、あちこちに石仏を祀る、陰気な尾根道を歩き、ある所から、道もない急な崖を手をつきながら下る。岩をかむ波の音が急に高まり、磯の匂いが濃くなってくる。

釣り場では二人はほとんどしゃべらない。場所も離れているし、また釣竿を垂れている時の義郎は、ふだん以上に無口になった。

昼ごろ、岩の上でいっしょに、道子が持たせてくれた弁当を食べる。義郎は光昭に何かと言葉をかけただろう。おもしろいことも言いかけたかもしれない。そんなときは、光昭もさすがに笑顔くらいは見せただろう。しかし、仮面の下の正体は忘れていない。

光昭がたまに釣り上げるのは、ベラやフグ、せいぜいガシラくらいだった。それに浅いところで釣っているから、よく海藻や岩に針を引っかけ、釣り糸を切ってしまう。すると釣り針を自分で結ばねばならない。そんなことをくりかえしているうちに、光昭は釣りに飽いてしまう。岩の上に竿を投げ出し、することもなく波や沖の方を眺めている。それは途方もなく長い時間のように思われた。

義郎はクロベやメバル、たまにグレなどを釣り上げることもあるが、船の漁師のようにかはばかしくは釣れない。竿を構え、じつと海面を見つめている時間が長い。よくタバコをくわえる。そんな義郎は、どこか暗い表情をしていた。自分の内側に入りこみ、もう光昭のことなど眼中にないようだった。

そんなときの義郎の心は、むしろ光昭には謎めいていた。けれども、後年、多少とも忖度したのに、義郎はそんなとき、日常の仕事のほか、不本意な自分の人生への嘆きや懷疑や憤りにとらわれていたこともあつただろうと思えた。

お父さんはな、戦争さえなければ順調に大学まで進み、水産業か水産研究の世界で身を立てるつもりだったんや、と昔、義郎は子供たちによく語つたものだ。ところが戦争で頼りの兄を失い、しかも敗戦で多数の親族が外地から引き揚げてきた。祖母は泣いて、旧制中学を卒業したばかりの義郎に働いてくれと頼んだ。義郎も泣いて進学を断念した。そのときから、義郎はただ一人の男手として親族の生活を支えるために奔走したらしい。

敗戦後の四、五年、義郎は島の生業の常として零細な潜水船に乗りこみ、主に瀬戸内海の各地に仕事を求めた。潜水夫を沈めて貝を獲るのはまだよいが、儲かるのは港や海に沈んだ砲弾の引き揚げの仕事だった。しかしそれは事故も頻発する危険な仕事で、利権を争って刃傷沙汰などもあり、法を犯すようなこともしたという。そのうちに結婚もした義郎は、いかにも自分の身体や性向がそうした荒い海の仕事に不向きなことを悟り、安月給でも生活は安定する地元の町役場に奉職した。やがて子供も生まれた。……

他には人の姿もない島のほとりで、釣竿を構えながら、義郎はそうしたままならぬ自分の人生を見つめていたのかもしれない。若さを頼んで、いつかしみつつらしい小役人の生活などうちやり、危険を冒しながらでも水産関係の事業を起こすという企みなどにふけてもいたのだろうか。

島の東側なので、午後は日が陰り、海面が黒ずんだ。そこへ日の豊かに照っている沖の方から大小のうねりがゆっくり寄せてきて、岩場と崖の間の狭い場所を盛り上げ、ドン、ドン、ザザアツと音立ててくだけ、しぶきをあげる。後には白い泡が浮き、それは引き波にゆっくり引かれて外に戻ってゆく。うねりは、豪快にしぶく、大きいものの方がおもしろい。

波がたわむれているうちには、泡の間が急に透き通り、海底にゆれる海藻があやしいほどきれいに見えることがある。海面すれすれの、カキや亀の手をび

っしりつけた岩場にはカニがへばりついている。その上方で、水位の上下に合わせてフナムシの群れがさかんに動く。その岩場の先に父の長靴が立ち、そばに餌箱やタモや魚籠がある。父はタバコをくわえ、海面を見つめている。海面に丸い赤い浮きがたゆたっている。父の向こうに、大洋がうねり、水平線の近くを大きな船が通ってゆく。

そうしたとき、海に魅入られたように、一度光昭は崖から転落した。居眠りでもしていたのか、それとも自分から飛びこんだのか、今となってはもうさだかではない。ただ、身体の急に自由になった感触と、不意に海面がせり上がってきたことをおぼえている。その瞬間の光昭は、不思議にやすらかな気持ちだった。怖くも悲しくもなく、心地よい眠りに誘われるようだった。

それからどうなったのか。我に帰ると岩場の上に裸で寝かされ、義郎に乾いたタオルで身体中をこすられていた。義郎は恐ろしいほど真剣な表情をしていた。その髪もシャツもズボンもすっかり濡れ、雫をしたたらせていた。義郎の背後に崖が屹立し、上空いっぱい光が群れていた。義郎は不意に満面の笑顔になって、「危なかったのう、よかったのう」と語りかけたように思う。光昭のドジにちがいないのに、少しも叱らなかつた。

何ということもない、それだけの記憶だ。ただ、今光昭は一人で義郎のそばに付き添い、義郎とのいくつかの記憶をおのずと探ってみるうち、二人の関係にとってはそれこそがもつとも大事な記憶ではなかつたかと思えてくる。もう四十年近くも前の、故郷の島の釣りの光景。海に落ちて溺れかけた子供。それを飛びこんで助けた父親。それはほんの短かい動画にすぎないけれども、そのときの日の光や波の音や潮の匂いは今でもあざやかによみがえってくるようだ。一瞬でもよいから、もう一度あの時に戻れないか。

翌朝、朝食の後、義郎は少し大便を漏らしてしまった。便意を訴えるので、光昭は急いで車椅子で斜め向かいのトイレに連れていったが間に合わなかつた。立たせてパジャマのズボンと下着をいっしょに脱がせ、まず紙で始末し、「待つてよ」と言いおいて別室から熱湯を汲んでくる。それを水で埋め、尻や股を古タオルで拭く。ついでに、脚の方まで、別のタオルで拭く。乾いた皮が雲母のようにぼろぼろと剥がれ落ちる。部屋から新しい衣類を持ってきて、はかせる。

「お父さん、ちよつと遅かつたな」

光昭は笑いながら言う。義郎はトイレの壁に向いたままで、

「ほうじやな。ちよつと、遅かつたな」と、ややはにかむようすだ。

昼ごろでよいといっておいたのに、道子は十時前にはもうやってきた。

「家におつても、することないけんな。おかげでよう眠れたわ。風呂にも入れたし、元気になつたわ」

昨日は美容院にも行ってきたといつて、気分もよさそうだった。

目ざとい道子は、ベッドの下の洗濯物を入れる袋がふくらんでいるのを早速見つけて、「どしたん？着替えしたん？」

「いや、下だけじゃ。今朝、ちよつと汚したけん」

「まかしたんかえ？」

「ちよつとな」

「このごろ、たまにまかすんじゃわ。ほら、大変じゃったな。お父さん、またまかしたんかえ。あかんなあ。あかんなあ」

ベッドの義郎はきまりが悪いのか、胸もとで小さく手を振る。二日ぶりに妻の顔を見て、義郎の表情は単純になっている。目に甘えるような光が出ている。

「しゃーないな。これからは、早めに言わんせよ」

「おう、おう」

義郎と光昭の間に道子が入り、光昭は急に義郎の世話から解放された。安堵のかたわらに、わずかに寂しさのようなものも動いた。

道子は光昭のために弁当を買ってきていた。光昭はそれを食べながら、道子に、薬や血圧やリハビリのこと、見舞い客のことなどを伝えた。俊介が来て、義郎の今後を話し合ったことも。日曜だから、今日も俊介は来てくれるだろうと道子がいう。

しばらくすると、いつものように義郎が、光昭の名を呼び、もつれる舌で、「こうべ、もう、帰れ」と手振りをまじえながらいう。

「今日はゆつくりでええんじや。日曜日じゃけん」と光昭が答えても、義郎は何度もくりかえす。それで、道子が紙に控えていた近くのバス停の時刻表を見て、駅前で乗り換える高速バスの時刻も調べて、次のバスで帰ることにした。ズボンを着替え、部屋の隅のロッカーに掛けてあったブレザーとコートを着こむ。マフラーもかける。

「今日は寒いぜ。ぬくうにしていなんせよ」と、故郷の島の言葉で道子がいう。

「光昭。会社の方、大変なんじやろ？このごろは、せわしいんじやるなあ」

「いや、ほうでもない。まあ何とかやつとる」

「せわしいときに、ありがとな。お父さんのためになあ」

「ほら、あたりまえだろ。息子なんじゃけん」

道子は紙袋に見舞い客が置いていった果物を詰めこみ、どうしても持って帰れ、カナちゃんやアツちゃんに食べさせよと光昭に持たせる。

もうベッドに起き上がっている義郎に、早くも気配がある。道子によれば、この病院に移ったところから義郎は涙もろくなり、見舞いの客と別れるときにはよく泣くという。この間、朋美が付き添いに来たときも、ひとしきり泣き合い、妻は別れがたかったという。それで、光昭は義郎の肩に手をかけながら、

「お父さん、ほな、いんでくるけん。また来るけんな。まあ、焦らんと、ゆつ

くり、リハビリしたらええ。ほなな」と声をかけると、荷物をつかんでさつと部屋を出ていこうとした。さすがにドアのところ一度振り返った。ベッドの上で、手すりにすがった、パジャマ姿の義郎の顔が歪んでいる。かたわらで道子も鼻をすすっている。手を挙げてから光昭は、ロビーのエレベーターのところまで一気に歩く。不意に堰を切ってしまう感情があった。

外に出ると、空は曇り、たしかに寒気が厳しい。昨夜来の雨で、病院の広い駐車場が濡れて黒ずみ、ところどころ光っている。バス停は道路を渡るとすぐで、狭い停車場にそこが始発になるバスがすでにうずくまっている。エンジンはかかっている。開けられたままのドアから乗りこむと、厚着をした老人が二人、前の方の座席に身を縮めていた。

バスの窓越しに、四階建ての、病院にしてはカラフルな建物が、無人のようにひそまっている。光昭は、自分が今たどってきた足取りのままに、見えないものでまだ病室とつながっているような感覚をぬぐいきれない。

やがて粗末な木造の休憩所から、紺の制服の小太りの運転手があくびをしながら出てきた。冷たい風が吹きこんできて、川の水が匂った。